地蔵清水井戸跡

発掘調査報告書

鶴見大学図書館
寄贈刊行物

1992·3
松本市教育委員会

地蔵清水井戸跡

発掘調査報告書

1992·3
松本市教育委員会

はじめに

松本城の東外堀の北辺が西へ曲って北外堀となるコーナーの土塁上に設けられた井筒から滾(こん)々と清水が溢れて堀へ注ぐさまを今も懐しむ年配の方が多い。堀端を歩いて来て、この清水に手を浸し、また口に含んだ思い出を語る人も少くない。「地蔵清水」の名は、ここの町名であるとともに、この井戸の呼び名である。

江戸時代以来の史料には「地蔵清水ノ井戸」あるいは「二ツ井戸」と記録され、城下の「源智井戸」や「槻井泉ノ井戸」とともに松本の名泉に数えられて来た。また、この井戸には地蔵尊霊験の伝承も古くからあり、地元の人々は親近感以上、一種敬慕の気持ちをもってこの井戸に接して来ている。

昭和54～59年にかけて行われた二の丸御殿跡の発掘調査の際、検出された御殿内の二つの井戸がいずれも円型井側に底板のある「溜(ため)井」構造であることが判明した。ではその水源はどこか、いろいろ探索したところ、嘉永年代の古文書のほか、二つの「溜井」へ向う「埋樋(うずみひ)」（通水用木管）の位置や勾配から推して、その最有力候補が「地蔵清水ノ井戸」ということになった。もちろん、この井戸は二の丸御殿とは堀を隔てた三の丸地籍にあるので、水堀を越える構造や技術に相当な工夫が施されていたと思われる。「地蔵清水ノ井戸」は御殿の台所にとっても大事な水源であった。

さて今回、平成元年度に実施した都市計画道路宮渕新橋上金井線（葵の馬場通り）の道路改良工事と、それに伴う史跡松本城北外堀外側土塁改良工事によって、前記の土塁コーナーにある「地蔵清水ノ井戸」の井筒が撤去され、その東脇に建つ「地蔵尊出現霊水地」の記念碑も一時的に除去された。

一時は枯渇状態に近かった「源智井戸」も「槻井泉ノ井戸」も、近年相ついで復活の手が加えられ、往時の姿が蘇った。次は「地蔵清水ノ井戸」の番であると、地元住民からはこの井戸の復興に熱い期待が寄せられている。道路改良と土塁改修工事が終了すれば、地元住民ばかりでなく、往時を懐かしむ市民の要望に応えて、この井戸を復興し記念碑も元へもどさなくてはならない。そのためには何を措いても復興の資料を整えることが必要である。このため今回、「地蔵清水ノ井戸」跡の発掘調査を行い、幸い、古絵図に示す通りの位置に二つの井戸水源を検出するとともに、井側構造の一部および良好な湧水状況を観察することができた。

例　　言

1．本書は松本市丸の内５番、旧地蔵清水通り（市道1064号線）の北詰めにある地蔵清水井戸跡の発掘調査（調査期間　平成３年３月６日～19日）報告書である。

2．地蔵清水井戸跡の発掘調査は、平成元年度に実施した史跡松本城北外堀外側土塁の改修工事によって撤去された所謂「地蔵清水ノ井戸」のコンクリート製井筒へ湧水を供給している水源を確認するとともに、井戸復興の資料を得ることを目的に実施したものである。

3．調査は松本市教育委員会が調査員を派遣して行い、その調査結果の大要は平成３年４月『地蔵清水井戸跡　発掘調査概報』として報告した。

4．本書は、上記『概報』に基づいて挿図、図版を整理し稿に手を入れて編述した。

5．本書の編集と執筆、整稿は、調査員　沢柳秀利、住田　正のほか松本城管理事務所研究専門員　藤井祐二が担当した。

6．測図、写真撮影、遺物の整理には次のものが当った。

　　遺構の測図……沢柳秀利、久根下三枝子

　　写真撮影……沢柳秀利、住田　正

　　遺物の整理……百瀬公恵

7．本書に係る実測図、写真、遺物は松本城管理事務所（松本市丸の内４－１）で保管している。

目　　次

はじめに
例　　言
Ⅰ　調査に至るまでの経過と調査班……11
　1　調査に至る経過及び調査目的……11
　2　調査班の編成……11
Ⅱ　調査地の立地と歴史的背景……12
　1　松本城周辺の地形・地質と湧水……12
　2　「地蔵清水ノ井戸」の沿革 ……14
　　（1）由　来
　　（2）史　料
Ⅲ　調査区の選定……16
Ⅳ　調査の概要（含日誌）……16
Ⅴ　調査結果の考察……23
　1　Ｉ２について……24
　2　Ｉ３ＥとＩ３Ｗについて……25
　3　その他の遺構など……25
まとめ……27

挿　図　目　次

第１図　松本城位置図……9
第２図　松本城周辺地図……9
第３図　松本市内の湧水分布図……29
第４図　発掘調査区選定図……30
第５図　発掘調査位置図……30
第６図　遺構平面図……31
第７図　地層断面図……31
第８図　井戸実測図……32

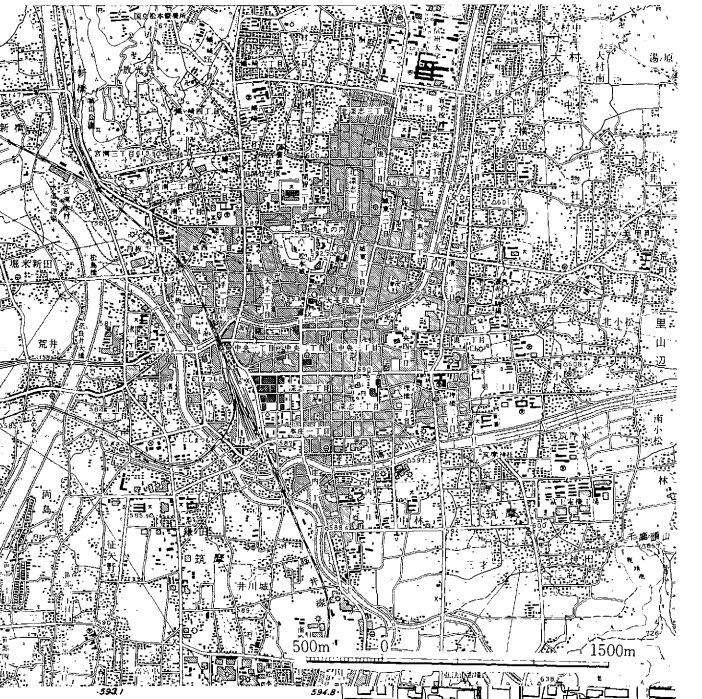
第９図　井戸遺構側面模式図……33
第10図　井戸復原模式図……33
第11図　埋戻し断面図（模式図）……34

図　版　目　次

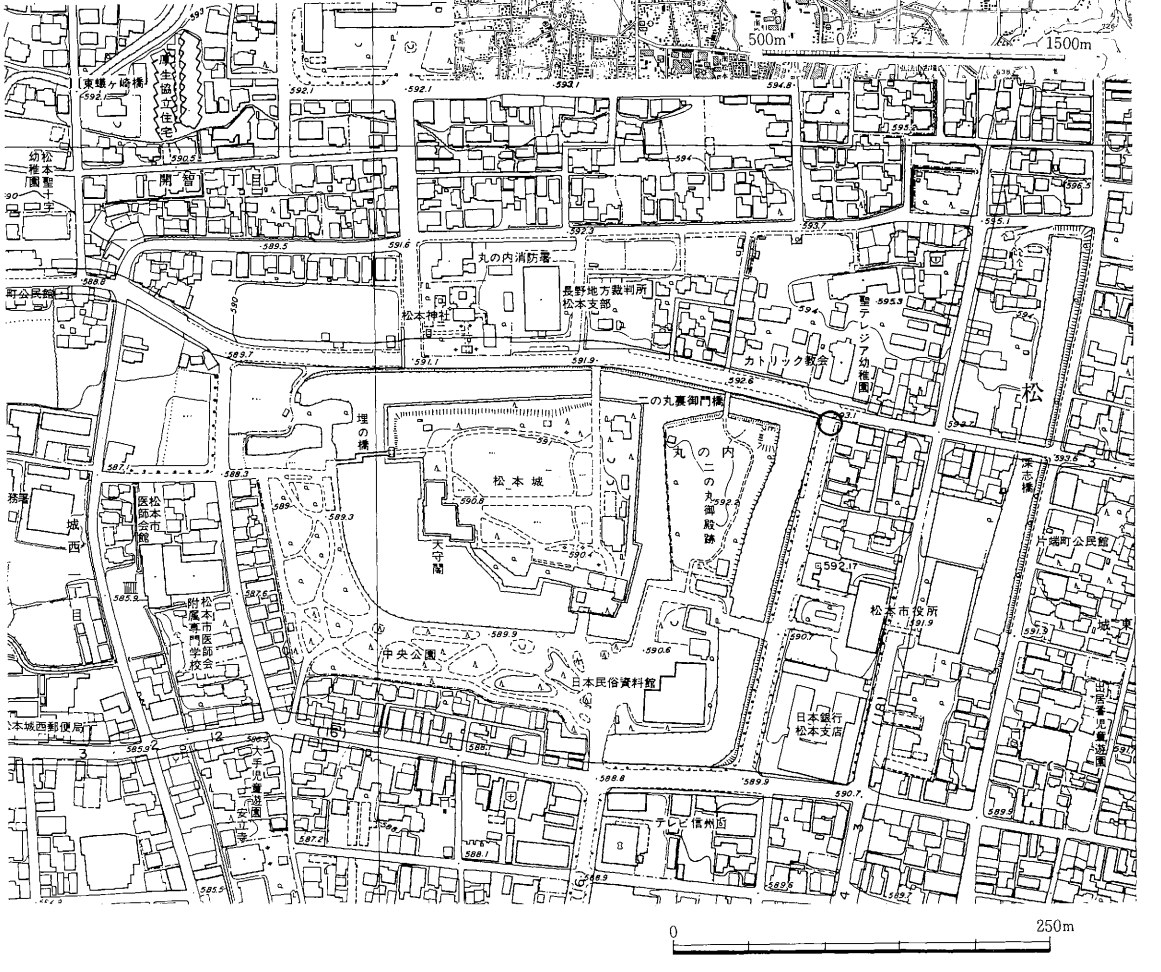
図版１　「地蔵清水ノ井戸」と「地蔵尊出現霊水地の碑」……７
図版２　「松本城下大絵図」（部分）享保13年……36
図版３　「深志城内曲輪全図」　推定明治11年……36
図版４　「信州松本御城内地蔵清水井戸分水之図」　嘉永４年……37
図版５　昭和47年ころの「地蔵清水ノ井戸」……37
図版６　「地蔵清水ノ井戸」付近の水道工事……38
図版７　水道工事で検出した木管　東側……38
図版８　水道工事で検出した木管　西側……39
図版９　コンクリート井筒（Ｉ２）とその上の角柱３本……39
図版10　西側に出たコンクリート角柱……40
図版11　木製井側（Ｉ３Ｅ）に載るコンクリート井筒（Ｉ２）……40
図版12　井筒（Ｉ２）と井側（Ｉ３Ｅ，Ｉ３Ｗ）の検出……41
図版13　木製井側（Ｉ３Ｅ）の鉄箍（たが）と竹箍……41
図版14　井側をとりまく東側と南側の角材……42
図版15　井筒から外堀へ向う長短の石綿管……42
図版16　出土した寛永通宝……43
図版17　埋め戻し……43
図版18　木製井側の中心にたつ標示杭……44
図版19　調査区路上の標示杭……44
図版20　発掘調査終了後の「地蔵清水ノ井戸」跡……45

図版 1 「地蔵清水ノ井戸」と「地蔵尊出現霊水地」の碑

第1図　松本城位置図



第2 図○印は地蔵清水井戸位置



第 2 図　松本城周辺地図

Ⅰ　調査に至るまでの経過と調査班

1．調査に至る経過及び調査目的

史跡松本城の二の丸東北隅にある所謂「地蔵清水ノ井戸」は、北及び東外堀の入隅部を一部削平したコーナーにあり、円形平面のコンクリート井筒の上にコンクリート製の蓋を置き、井筒低部のパイプ（鉄）から堀へ水を落とす構造になっている。水源は、少し離れた「井戸」東側の地蔵清水通り（市道1064号線）地下と推定されるが、最近は湧水量が減り、季節によって水が涸れることが多くなった。また、東脇には井戸の由来を記した「地蔵尊出現霊水地」の碑も建っている。

ところが、平成元年度に実施した都市計画道路宮渕新橋上金井線（葵の馬場通り）の道路改良工事とそれに伴う松本城北外堀外側土塁工事によって、前記入隅部にある「地蔵清水ノ井戸」も井筒が撤去され、また記念碑も一時除去された。

「地蔵清水ノ井戸」は、松本城内にあって、近世以来明治の初めまで葵の馬場通りと地蔵清水通りのＴ字型交差点付近に存在したことが各種古絵図に見え、地蔵尊出現の冷水との伝承もあり、宮村町（町人地）の「源智ノ井戸」と並ぶ名泉として、古くから当地方の人々に親しまれてきた。しかし、明治以来120年余を経た現在では、受水部井筒のほかは湧水部井側（地中に埋まっている筈）を実見した人は既に絶え、その正しい位置や形状を知る人はほとんどいない。

そこで今回、名泉復活を希望する地元住民や由緒を懐しむ多くの市民の要望に応えて、早急にその水源を確認する調査を行って、「地蔵清水ノ井戸」復興の資料を整えることが必要となった。調査は学術的発掘調査（第１次）として実施し、（ア）井側の位置（イ）井側上縁の形態及び材料（ウ）井側の数や大きさ（エ）その他の井戸遺構（オ）地下水の湧出状況　等を明らかにすることを目的とする。

2．調査班の編成

調査員

桐原　健　　松本市文化財審議委員・日本考古学協会々員

中川　治雄　　松本市文化財審議委員・信濃史学会事務局長
太田　守夫　　長野県地学協会々員
住田　正　　松本市教育委員会・松本城管理事務所研究専門員
熊谷　康治　　松本市教育委員会・社会教育課主査
田中　敏和　　松本市都市開発部・都市計画課技師
沢柳　秀利　　松本市教育委員会・松本城管理事務所事務員

事務局
浅田　淳　　松本城管理事務所長
輪湖　武男　　松本城管理事務所々長補佐
小沢　孝志　　松本城管理事務所　主査
奥原　克也　　同　上　　主事

事務所
松本市丸の内４－１　松本城管理事務所　Tel.32-2902

II　調査地の立地と歴史的背景

１．松本城周辺の地形・地質と湧水

地蔵清水を含む松本城周辺は、古来から地下水や湧水の豊富な場所とされてきた。地形上から見ても複合扇状地の扇端に位置し、伏流水・湧水の状態は典型的とさえ言える。

すでに『松本城二の丸御殿跡発掘調査・史跡公園整備報告書』(1985・松本市教育委員会)には、観察された地形や地層に基き、伏流水や湧水との関係が述べられてあり、また、市内の深井戸ボーリング資料を集成した『環境保全調査研究業務委託報告書』(1980・松本市)には、松本城を含む市街地及び周辺地域の地下水の状況が詳しく記載されている。

これらの報告書にも述べられているように、扇端の前面は複合扇状地の伏流水の集水区域で、運び込まれた砂・泥や腐植物が混ざって、沼沢性（低湿地）の堆積が行われている。このため扇端やその前面の上部地層は、砂泥層と呼ばれる黒色腐植土・シルト層・砂質泥

層・砂質層・砂質礫層、あるいはこれらの交錯した地層からなっている。この上層部は堆積の変化が著しく、数メートルの距離でも相を異にすることがある。上部層の厚さは10m前後で、層内に透水層や不透水層があると、その深さで伏流水の存在をみる。このため地下１m，２m，４m，５mで湧水というように、各地で地下水をみることになる。「地蔵清水ノ井戸」周辺でも、市役所庁舎や民俗資料館の地下・二の丸御殿東堀や北堀の石積みなどに湧水がみられる。上部層の下部は、次第に安定した砂礫層や粘土層に移っていて、深井戸の水源の対象とされている。

今回発掘した「地蔵清水ノ井戸」は、女鳥羽川扇状地の扇端上にあり、この水系の伏流水の影響を大きく受けている。また湧水分布によると、夏・冬の地下水面等高線にあまり変化を示さない地域である。井戸の地下水（伏流水）は上部層中でも、表面に近い１～２m、あるいは湧水（自噴）の場所に当たっていたものと考えられる。実際に地蔵清水の属する丸の内地籍には、かつて自噴や地下水面の浅い湧水が多くみられたし、柳町・泥町の旧町名がその状況を示している。これらの中で、湧水量の豊富なものが引井として利用されたものと思われる。

発掘した井戸の周辺の地層は、明らかに埋立てとみられる上層と、自然堆積の黒色土と砂礫層からなる下層に分けられる。下層の自然堆積は、すでに井戸の設置時あるいは改装時に破壊されていて、黒色土と砂礫層は動かされている部分が多い。しかし水量は依然豊富なものがあり、流れの方向は、地形面の傾きと同様に南西～南と考えられる。「地蔵清水ノ井戸」は、かつて二の丸御殿跡発掘調査の時の濠内観察から南西流とみられる。そのときの湧出量の状況を、参考のため『二の丸御殿跡発掘調査書』によってあげると次のようである。御殿跡東堀の石積み（地蔵清水に続く）7.8ℓ/分、同堀底部4.7ℓ/分、民俗資料館地下189ℓ/分であった。

また、現在史跡に指定されている松本城の堀は、その総面積が約35,000m²あり、堀水の総量は約24,000トンと推定される。これらの水は、ほとんど付近からの注入水と堀底や石垣低部からの湧水によって保たれている。「北馬場ノ井戸」からの揚水2,880トン/日（深度80m、揚水位30m）や、「北門ノ大井戸」の自噴水864トン/日などがその主たるものである。

位　　置	所有者	口径　mm	深度　m	自然水位m	揚水位m	揚水量ℓ/秒
丸の内	松本市	400	80	自噴	1.40	自噴 1200 2226
大手3-4	長野銀行	350	130	2.45	5.52	1000
大手4	ホテル花月	250	80	自噴	3.12	1000

なお、周辺の深井戸の状況を『環境保全調査研究業務委託報告書資料』によってみると、上表のとおりで、上流の水系から供給される地下水の豊富な水量がうかがえる。

2.「地蔵清水ノ井戸」の沿革

(1) 由 来

「地蔵清水ノ井戸」の由来について『筑摩郡北深志町地誌』(明治9年編)は、享保9年(1724)編集の『信府統記』と同様の伝承を伝えている。それによると、現在外堀の東側丸の内5番付近の地は、古く中世のころ市ノ辻と呼ばれていた。清き冷水が湧き、商賈(こ)が並び、市の立つ繁栄の場所であった。また隣接する泥町には生安寺という寺があり、その境内に地中顕出の伝説をもつ石仏(文治4年銘の地蔵尊)が祀られていた。

やがて天正15年頃、松本城の拡張を企てた城主小笠原氏が三の丸を整備するため、市ノ辻、泥町辺の町屋や寺院をそっくり川南の地(本町)へ地替えさせ、ここを侍町とした。それからはこの地で市の立つことがなく、市ノ辻の名は失われまた生安寺の地蔵尊もここを離れた。以来、市ノ辻に残った冷水は「地蔵清水」と呼ばれ、それが町の名ともなった。また隣の泥町は、柳の木が目立つところから柳町と名付けられたという。また別に、地蔵尊出現の霊験については、昭和3年建碑の「地蔵尊出現霊水地」の碑文に、「古ヘ泥町ヨリ本町ヘ移転セル生安寺及ビ境内ノ地蔵尊ハ當城主此ノ井戸ヲ掘リ玉ヒシ時浄水ト共ニ不可思議ニモ地中ヨリ出現シ玉フ、尓來此ノ地ヲ呼デ地蔵清水ト云フ(後畧)」と記している。

(2) 史 料

「地蔵清水ノ井戸」に関する史料で最も多いのは絵図類で、城郭図や城下町絵図などである。元禄年間の「松本城並家中屋敷割絵図」(石川義昌氏蔵)や、明治11年(1878)の「深志城内曲輪全図」(松本中央図書館蔵)まで、年代の異った幾敷かの絵図面にこの井戸が登載されている。いずれも地蔵清水町の北詰めに印され、簡単な井桁マークだけのもの、井筒が二つあることを示すもの、「二ツ井戸」と注記のあるもの、絵画的に井戸の覆屋を描いたものなど、その表現は精粗いろいろである。

なかでも享保13年(1728)秋改めと銘のある「松本城下ノ図」(松本城管理事務所蔵)は、実測による図示らしく精度が高い。地蔵清水町と葵の馬場通りのT字型交差点の少し南に、井桁二つを東西に並べ路上やや東寄りに描いてある。その上二つの井桁を長方形の枠で囲み、付近の道幅を7間半(13.5メートル)と注記してある。ちなみにこの道路の現況幅員

が13.5mであるから、地蔵清水町は当時から現在に至るまで道路の拡幅はほとんどなく、井戸の位置を把握する便が大きい。

文書資料としては、前記の『筑摩郡北深志町地誌』・『信府統記』のほか嘉永4年（1851）年記の「信州松本御城内地蔵清水井戸分水之図」がある。

『信府統記』では、前記の伝承とは別に、松本城地形間数記の項で城内屋鋪割町間小路割として、「太鼓門前大腰掛共南北百三拾四間余、家数太鼓門前三軒、同所北ノ端ニ井戸二アリ、是ヲ地蔵清水ト云フ」とあり、簡単ではあるが、井戸の位置や井筒の数及び名称について述べている。

嘉永4年の「井戸分水之図」は、この井戸から侍屋敷へ通水する水量を定め、井戸の口や樋の大きさなどを改修する工事に関するものである。図面は2枚で、1枚は改修前の現状図で他の1枚は完成図である。2枚とも地上に竹箍（たが）を巻いた桶状の井筒が東西に二つ並び、改修前では西側井筒から樋が出て三方面の侍屋敷へ水を流し、改修後は東西両方の井筒から三方面へ分水するようになっている。当初東側井筒から流出する水は「捨水」となっている。これは井戸端で使う水のことであろう。改修後はこれがなくなり、両方の井筒とも侍屋敷への水源に改められている。通水用の需要が増えたためであろうか。また、分水中最も通水量の多い土井尻行きのものは、途中に分水枡を設けて一つは内田元右衛門流し行き、他の一つは二の丸御台所流し行きに分けている。昭和54年の二の丸御殿跡発掘調査の時検出した御殿内の二つの井戸が、底のある溜井（貯水用）であったから、付近に水源となる湧井が探索され、その一つがこの「地蔵清水ノ井戸」と考えられた。この井戸は、おそらく嘉永年代以降は専ら城内の源泉として用いられたのであろう。

明治10年代以降は井戸に関する資料は少くなる。明治12年（1879）の「東筑摩南北深志町之図」（松本城管理事務所所蔵）はかなり精しい出来のよい地図であり、宮村町の「源地冷泉」は登載されているが、「地蔵清水ノ井戸」は記載からもれている。一方、明治末年から大正初年をこの井戸近くで少年期を過ごした付近の故老達は、等しく「地蔵清水ノ井戸」をよく覚えている。井筒から溢れ出る水の記憶は鮮明であるが、井筒の位置を道路上とする人は全くない。井筒は、外堀が東から北へ規矩折（かねお）りにまがる入隅部分にあったと語っている。昭和3年に設置された「地蔵尊出現霊水地」の碑も、外堀のコーナー部に建てられたものである。昭和47年発行の『松本城』（信濃毎日新聞社編）では、井筒の口から流出する水の写真に添えて次の説明文を載せている。「……内堀、外堀、総堀の水源はすべて湧水である。なかでも最も大きな湧水源は城内三の丸（二の丸御殿から堀をへだてた東北隅）

の地蔵清水である。城内侍屋敷の飲料水であり、堀の水源であるこの井戸は、年中変わることなく湧出し、源池ノ井戸の涸れた現在では事実上、松本一の名水となっている……」と。

見てきたように「地蔵清水ノ井戸」は明治末年頃から路上の井筒を廃し、これから少し離れた外堀際に引水して井筒を据えた。以来、大正，昭和，平成と流出する水量はめっきり細くなったが、「地蔵清水ノ湧水」として長く松本市民に親しまれてきたのである。

III　調査区の選定

調査区を選定するに当っては、「地蔵清水ノ井戸」が記載されている各種絵図のうち最も精度の高い「享保13年秋改松本城下ノ図」によるほか、現地付近の水道工事の際検出した(平２・５・11) 木管の位置と方向及び外堀の東北入隅部に残るコンクリート井筒への導水用パイプの方向とを勘案するほか(第４図)、現地の激しい交通事情を考慮して約13.5m²(東西4.5×南北３m)の調査区を決定した。５月に検出した木管がその周囲に厚い粘土を伴っていて深さが地表から約1.3mであったから、これを掘削の深さに想定した。

IV　調査の概要（含日誌）

平３．２．12(月)　「地蔵清水ノ井戸」跡発掘調査打ち合わせ会　PM ４：00～５：30

場　所　松本城管理事務所，発掘現場

出席者　桐原　健，中川治雄，太田守夫，熊谷康治，田中敏和，住田　正，沢柳秀利，奥原克也

内　容　○調査地を確認

○「発掘調査について」原案を検討する。

(主な意見)

ア．名称について　「地蔵清水ノ井戸跡発掘調査」とする。

イ．調査目的　今すぐ井戸遺構が壊される状態ではないから、これを学術的発掘調査と位置づけるが、現地がとりわけ交通の

激しい場所であるうえ、都市計画道路宮新線の道路改良工事(平成２年度分)との調整も考慮して、調査目的を最低限に絞って調査が短期間で終了するように配慮すること。しかし、文化遺産である「地蔵清水ノ井戸」を復原する時には、再び２次調査を行うことが求められる。

ウ．調査期間と時期

交通規制対応及び都市計画道路工事との関係を考慮し、３月上旬１週間とする。

エ．発掘作業々者が決まったところで事前打ち合わせをし、特に調査目的と手段及び安全対策の指示をすること。

3．3．1(金) 「地蔵清水ノ井戸跡発掘調査」打ち合わせ会　PM ４：00～

場　所　松本城管理事務所，発掘現場

出席者　桐原　健，太田守夫，中川治雄，住田　正，田中敏和，沢柳秀利，奥原克也，山口（百瀬組），塩入正夫（筒井建工）

内　容　○現地確認

ア．発掘調査の手順，方法について

イ．安全対策について

ウ．実測及び図面について

エ．発掘調査は３月６日（水）開始とする

3．3．6(水) 晴 発掘調査（第１日）

出席者　桐原　健，浅田　淳，住田　正，沢柳秀利，小沢孝志，奥原克也，花井活郎（地蔵清水町会長），百瀬敏幸（百瀬コンクリート社長），山口（百瀬組），塩入正夫，宮村幸雄，他１人，神職２人

○安全祈願を行う（業者主催）。

○調査区を確定しスプレーで区画線を引く（東西4.5m，南北３m）。

○アスファルトを剝ぐ（厚さ10～15cm）。

3．3．7(木) 晴 発掘調査（第２日）

調査・作業者　住田　正，中川治雄，田中敏和，熊谷康治，塩入正夫，宮村幸雄，作業員２人

○アスファルトを剝ぎ、その下の整地層（砕石）を掘削する。

○ＰＭ２：20頃、調査区東寄りの場所で、地表から20cm位下にコンクリート角柱３本が現れ、その下からコンクリート井筒（Ｉ２）を検出する。

○Ｉ２の周囲（中程度の川原石）及び調査区全体を、およそ20cmずつ３回掘り下げ除土を進める。地表から70～75cm分を掘り下げると円形をしたＩ２の井筒が次第に現れるとともに、井筒東側と南側に横木（枠木か）があり、その外側には粘土が厚く施してあるのが観察される。

○この日 AM11：30頃、井戸の位置に関する新しい情報が寄せられる。

○情報提供者　松本市塩倉　太田義国さん　Tel.35-0676（元松本市土木課勤務　昭和31年に地蔵清水町の道路舗装工事を担当した）

○情報内容

ア．昭和31年の道路舗装工事の時、井戸を発見しこれを埋めた覚えがある。

イ．場所は現在の調査区より約1.5ｍ程南である。

ウ．道路中央に直径約1.5ｍ位の井戸側（木製）があり、竹箍がはまっていた。

エ．大きな石を投入して井戸を埋め、その上を舗装した。

○情報の扱い

太田情報はかなり信頼性が高いと判断、太田さんが持っているという「野帳」を見せてもらった上、調査区を南へ1.5ｍ拡げることを考慮する。

3．3．8(金)
曇後雨

発掘調査（第３日）

調査・作業者　住田　正，太田守夫，沢柳秀利，桐原　健，塩入正夫，宮村幸雄，他作業員２人

見学者　永川強

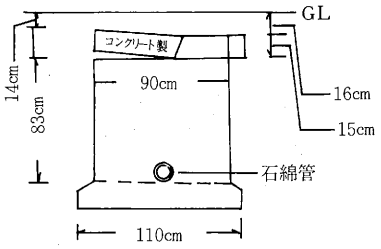
○調査区全体の除土を進める。調査区西側の地表下65cmにコンクリート角柱２本があり、その下部は丸い大きな川石が粗雑に組み合わされて（相当量）南北に続き、また西方は調査区外へも拡がっている。

○しかし、調査区西側の区画線付近は、崩落の虞があるから内側へゆるい傾斜をつけ安定勾配で掘削（川石除去）を進める。大きい川石は石組みというより乱雑で粗鬆（そしょう）な状態で空洞があり、石の隙間を通して地下水の溜っているのが見え、水の流れる音も聞こえる。なお西壁寄りに短い石綿管が西へ向っている。長さ75cm，直径7.5cm，高さ地表下74～93cmで、Ｉ２から西へ向う石綿管が出る。直径約10.5cm，長さ165cm

○掘削を続けてＩ２のコンクリート井筒下部のソケット（帽子のつば状）が出る。周囲は粘土が詰っている。

Ｉ２のソケット部外側に鉄製の箍のはまった木製井側もある。よく見ると鉄製箍の下に竹製箍もある。井側の高さは地表下106～117cmで、その直径はおよそ130～140cmと推定される（Ｉ３Ｅ）。

図Ａ　角柱



コンクリート製角柱

	(長さ)(幅)(厚さ)
ア．東寄りのもの	87×25×15cm
イ．中央のもの	105×26×15cm
ウ．西寄りのもの	107×25×15cm

３本とも南寄りの部分で折れている。

〈ソケット付　コンクリート製井筒〉

３．３．９(土)
晴

発掘調査（第４日）

調査・作業員　住田　正，桐原　健，熊谷康治，沢柳秀利，塩入正夫，宮村幸雄

○昨夜の雨のために溜った水を排水ポンプをかけて除去し、調査区全体の乾燥をまつ。

○昨日出土の木製井側（Ｉ３Ｅ）の上縁を基準に約20cmほど掘り下げる。Ｉ３Ｅの南側に木製の平板２枚出る。うち外側の１枚は両端が削られていて、２枚合わせると半月形の形になる。板の厚さは共に約４cmある。板の高さは地表下約105cmである。

○調査区西寄り石組みの中から別の木製井側の上縁部現われる。(地表下約107cm）上縁部は大きく孤状を描いているらしく、その１/３程度が確認

できる(Ｉ３W)。鉄箍が巻いてあるが上縁木部の腐蝕は甚しく、投入された石による欠損もある。井側の直径はおよそ170～180cmと推定され、Ｉ３Ｅより一まわり大きい。またＩ３ＥとＩ３Wの外周は約40cm離れて並び、その間は粘土で満されている。また両方の井側周囲も粘土で埋められ、井側内部には礫が詰っている。

○Ｉ３Ｅ南の半月形平板とＩ３W井側の間から寛永通宝２枚出土する（地表下119cm)。また、長い石綿管の横からも寛永通宝２枚出土(地表下116cm)。

○Ｉ３Ｅ及びＩ３Wとも井側上縁は腐蝕が進んで痩せて薄くなり、木目や節があらわになっている。また鉄箍の下の竹箍は円弧がはつれ、比較的損傷の少ない鉄箍と好対照をなしている。

○Ｉ３Ｅの南側に観察された枠木は、Ｉ３Wの南側へも長く伸びていることが分る。しかも途中には、先端が失われた短い横材が鎹(かすがい)で止められているのが観察された。東西に長い枠木はかなりの大材で、幅は約21cm，厚さは約19cm，長さは360cm以上（西端は調査区外）である。また、Ｉ３Ｅ及びＩ３Wの北側にも、南側の枠木に似た横材のあることが北壁土中や石組みの隙間に見えるが、調査区の安全勾配を保持するため充分に掘削することができない。

3．3．11(月)
雨

○降雨のため発掘調査を中止する。

○「地蔵清水ノ井戸」付近の故老宅を訪問し、この井戸に関する知見の聞きとりをする。

○花井活郎さん（松本市丸の内２－８）大正３年生れ　77歳

Ｉ３Ｅ，Ｉ３Wはもちろん Ｉ２も実見していない。子供の頃（大正10年頃）の記憶では、この付近はいつも湿っていてジブジブしていたことを覚えている。

○佐藤元司さん（松本市丸の内１－６）明治37年生れ　87歳

子供の頃Ｉ３Ｅ，Ｉ３Wを見た記憶はないが、「地蔵清水ノ井戸」のことを「二ツ井戸」と呼んでいた。昔、馬車が通って井戸付近が陥没したことを覚えている。

3．3．12(火)
曇

発掘調査（第５日）

調査・作業者　住田　正，太田守夫，中川治雄，田中敏和，塩入正夫，宮村幸雄

見学者　永川強

○調査区内の地下水の水位を測る。地表下117cm(雨後のため水位が高くなったかもしれない)。

○石綿管の勾配を測る。

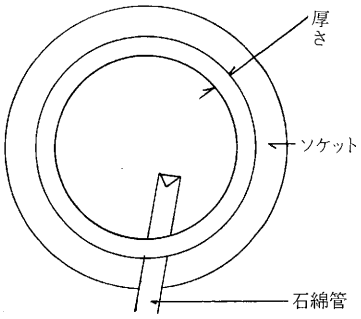
短い石綿管（長さ75cm）東は地表下74cm，西は同76cm

長い石綿管（長さ165cm）東は地表下95cm，西は同103cm

○Ｉ３Ｅ東側枠木の上の礫混り粘土を少しずつ除くと、枠木の上に長さ32cmほどの丸太材が並んで現れる。

○Ｉ２井筒の上のコンクリート角柱を除去し、井筒の中の中礫，コンクリートの砕塊，砂を取り出す。井筒内に長い石綿管の端が約35cm差し込んである。井筒の外径は約90cm，内径は約76cm，ソケット部外縁約110cm，縁の厚さ6.5～７cm，正円ではない。

図B



〈コンクリート井筒平面図〉

3．3．13(水)
晴

発掘調査（第６日）

調査・作業者　住田　正

○地下水位－107cm（前日より10cmあがる)。

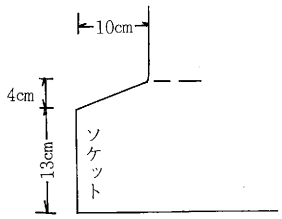
○百瀬コンクリート工業㈱社長百瀬敏幸氏(松本市城西1-1-45　Tel.33-1170)を煩わしてＩ２のコンクリート井筒の製法や時期等について調べてもらう。

○このコンクリート井筒は流し込み製法によるもので、型枠詰め製法ではない。松本地方において、この種のコンクリート製品が型枠詰め製法で行われたのは大正12年から約10年間である。流し込み製法が行われたのはそれ以後であるから、この井筒は昭和７年以降のものと考えられる。また、石綿管は水道管として昭和年代に入ってから使用されたもので、

昭和30年頃が終期である（以上百瀬氏談）。

コンクリート井筒と石綿管の取り付け孔は、まず防水用に粘土を巻きその上をモルタルで処置してある。Ｉ２のソケット部を計測する。

図C



〈コンクリート井筒ソケット部〉

Ｉ３ＥとＩ３Ｗの井側を巻いてある鉄箍は、巾26～28㎜の薄いものである。比較的損傷が少なく、繋ぎ目は鋲でかしめてある。

Ｉ３ＥとＩ３Ｗの直径を測る。

Ｉ３Ｗ　南北径　177cm

Ｉ３Ｅ　東西径　132cm，南北径　131～132cm

上條工務店棟梁、上條豊作氏（松本市平田，史跡松本城黒門枡形二の門及び袖塀を手がけた棟梁）を煩わして井側等木製遺構の材質を調べてもらう。

Ｉ３Ｅ、Ｉ３Ｗの井側はサワラ材（但しＩ３Ｅの一部にある補修材は不明）枠木（東側、南側）は総てクリ材、手斧（ちょうな）はつりで角材に仕上げてあり、建造物の土台の可能性がある。

Ｉ３Ｅの南側の平板は２枚ともクリ材、踏み板の可能性がある。

Ｉ３Ｅ東側に並んだ短い丸太はアカマツ材、

南側枠木に鎹で取り付けられた半折の角材と、北側の短い角材はともにクリ材である。

3．3．15(金) 晴・曇

○地下水の水位は地表下105cm

3．3．16(土) 曇

発掘調査（第７日）

調査者　熊谷康治，沢柳秀利

調査区の平板測量をする。

3．3．18(月) 晴

発掘調査（第８日）

調査・作業者　住田　正，塩入正夫，宮村幸雄

○地下水位は地表下103cm
○埋め戻し作業を行う。
○遺構保護のため、調査区全体に底部から約45～50cmの高さまで土のうを敷き詰める（約３段）。
○土のうの上に砂を約10cm敷き、その上にビニール・シートをかけ遺構を保護する。コンクリート井筒の中へは、中礫・コンクリート砕塊を詰める。
○ビニール・シートの上約70cmは砕石で埋め戻し、ランマーで転圧する。その間、木製井側の中心の位置に標示杭として「松本市境界柱」（長さ42cm）を立てておく（２本）。
○砕石の上にさらにビニール・シートを敷き、また８cmの厚さに砕石を入れ転圧する。
○５cmのアスファルト舗装を施す。標示杭の高さは地表面と同じ。

３．３．19(火) 晴
○横断歩道用のゼブラゾーンを施し、埋め戻しを完了する（埋め戻し横断図）。

Ⅴ　調査結果の考察

今回行った「地蔵清水ノ井戸」跡の発掘調査によって、３個の井筒（あるいは井側）を検出した。

最初に出土したのはコンクリートの井筒をもつ井戸遺構（Ｉ２）で、調査区の東寄りに当たりその上縁部の位置は地表下約31cmのところで、西へ向う長い石綿コンクリート管を伴っている。掘削が進みＩ２の井筒底部近くに、コンクリート井筒とは別にこれより一回り大きい円形の木製井側（Ｉ３Ｅ）の検出を見た。Ｉ３Ｅの真上にＩ２が載っているというより、Ｉ２がＩ３Ｅの中に嵌めこまれている形状である。井側上縁の高さは地表下約106～117cmであり、井側には鉄と竹の箍が巻かれている。また調査区西寄りには粗鬆な石組みがあり、その下部にもＩ３Ｅ同様円弧状をなす木製井側（Ｉ３W）を検出した。これにも鉄箍が巻かれているが、上縁部は腐蝕が目立ち円弧は途切れ勝ちである。深さは地表下107～131cmである。これらのほか、井筒・井側の周辺に角材・平板及びＩ３W上部に短

いもう１本の石綿コンクリート管が検出された。いずれも井戸に関する遺構と思われる。

１．Ｉ２について

Ｉ２はソケット付きコンクリート管を竪に使って井筒とし、Ｉ３Ｅの上に据えられている。その外径は筒部90cm，底のソケット部110cm，高さはソケット部まで含めると100cm(筒部のみでは83cm)，縁の厚さは6.5～７cmである。型枠流し込み製のため正円をなさない。

下の井側に嵌めこむように据えた置き方と、井筒下部に石綿コンクリート管（直径10.5cm）を嵌めて湧水を西へ流す構造とから見て、これはコンクリート井筒のＩ２によって、Ｉ３Ｅを補修したものと考えられる。補修時にはなおこの位置（Ｉ３Ｅ）に湧水が充分にあり、「地蔵清水ノ井戸」として、その水源が保たれていたことが判る。そこでＩ２に関して次の２点が解明したくなる。

その１

Ｉ３Ｅの補修のためＩ２を据えた時期はいつか。当地方におけるコンクリート管や石綿コンクリート管使用の歴史（専門家の知見）や、地蔵清水通りの道路舗装工事の記録に徴して考察すれば、その設置期間は最大昭和７～昭和29年ということになる。これでは幅が広すぎるので、あえて憶測すれば昭和10年前後とみたらどうか。

その２

Ｉ２を設置した当時の地表面の高さ（ＧＬ）はどの位置か。即ち路上にコンクリート井筒が出ていたか、または地中に埋まっていたかを考えてみたい。地蔵清水通り付近で長年を過した故老達の話では、「地蔵清水ノ井戸」の井筒から滾々（こんこん）と水が出ていたのは、すべて松本城二の丸の東北隅にある井筒からの記憶であって、地蔵清水通りの路上には湿潤地はあっても、木製井側はもちろんコンクリート井筒の覚えはないという。また、後年昭和31年の道路舗装工事に際しては、明らかに井筒が地中にあったことが知られている。従ってＩ２は、設置当初から井筒は路上に出ていないとみるのが妥当であろう。Ｉ２は水源であって、そこで水を汲んだり、井戸端で直接水を使うものではなかった。また、この井筒に伴って検出された石綿管は西へ向う勾配ではあるが、これをもって直ちに「地蔵清水ノ井戸」（Ｉ１）への導水管と見ることはできない。

2．Ｉ３ＥとＩ３Ｗについて

Ｉ３ＥはＩ２の真下の位置にあり、桶状の木製井側が、Ｉ２のコンクリート井筒のソケット部を包む形で検出された。上縁部が櫛の目状の凹凸で円弧をなして並び、鉄と竹の箍が巻かれている。竹箍ははずれて損傷が大きいが、鉄箍は比較的残りが良い。井側上縁の位置は地表下106～117cmにあり、その直径は132cm（東西径132.5cm，南北径131cm）である。井側の側板は腐蝕が進んで痩せて細くなり、木目と節が浮き出て、サワラ材特有の筋目（紋様）を残している。そのため側板の厚さは不揃で２～５cmである。

Ｉ３Ｗは調査区西寄りの場所で、多分、この井戸を埋めるために投入したと思われる石組みの下から検出された。投入の石と腐蝕のため井側の損傷はＩ３Ｅより甚だしく、井側上縁部の並び方もかなり歪んだ孤状となっている。また、調査区の端に寄っているため井側全体を検出することはできなかった。井側上縁の位置は107～131cmで、直径は177cm(南北）とＩ３Ｗより一回り大きい。井側の側面がサワラ材であることはＩ３Ｅと同様であるが、箍は鉄製のものだけが検出された。

Ｉ３Ｅ，Ｉ３Ｗとも井側の周囲は粘土で埋められ、井側内部は中礫や砂が詰まっている。Ｉ３ＥとＩ３Ｗは、その位置や形状、また素材から見て東西に並ぶ一体の井戸と見てよく、古絵図に描かれた地蔵清水の井戸＝「二ツ井戸」と断定してよい。この井側二つの井戸が中世以来の名泉で、湧水量豊かな水源として、二の丸御殿の台所や城内の侍屋敷へ引水されたものである。

そこですぐ知りたくなるのは、当時の地表面の位置（ＧＬ）である。調査による資料と嘉永４年の「信州松本地蔵清水井戸分水之図」を参考にして、かなり大胆に推定したものが第５図である。現在の地表面の下85cmを当時のＧＬとみると、木製井側はそれより約42cm立ち上がることになる。この数値は、「地蔵清水井戸分水之図」所載の完成銅桶の竪管が１尺３寸（約40cm）あり、計量枡が地下20cmと仮定したことによる。また分水枡を地下45cmとすると、それは現在の地表面より約130cm下となり、昨年５月水道工事の際検出した木管の深さと同じになる。

3．その他の遺構など

ア．Ｉ３ＥとＩ３Ｗの南側に、木製井側すれすれに接して東西に長い角材（Ｋ１）があ

り、Ｉ３Ｅの東側にも別の角材（Ｋ２）があってＫ１に載っている。またＩ３ＥとＩ３Ｗの北側にも、Ｋ１同様の角材（Ｋ３）が石組みの奥に観察された。Ｋ１、Ｋ２はクリ材で手斧仕上げのしっかりした角材（Ｋ１の木口は21×19cm，Ｋ２の木口は21×13cm）であり、これにＫ３を加えて考察すると、これらはＩ３Ｅ、Ｉ３Ｗを囲む枠木をなし、これにもし西側にも同様の角材があれば、井戸に伴う建造物（覆屋か）の土台と見られなくもない。とすれば断定はできないが、この角材の位置（深さ）が当時のＧＬとみることができる。下端が91cmであるから、その中央は先の推定ＧＬ（地表下85cm）とほぼ一致する。

イ．Ｉ３Ｅに接してすぐ南側に検出された平板２枚は厚さ４cmのクリ材で、２枚で半月形となっている。深さは地表下105cmにあり、井側横の踏み板とするには少し低いかも知れないが、撹乱による混入とはみえないから、ＧＬから１段（約20cm）おりて、井側横に敷いた平板と考えたらどうだろうか。ちょうど嘉永４年の「分水図」による仮定計量枡の位置（高さ）に当たる。

ウ．Ｋ２の上にあるアカマツ材の短い小丸太、Ｉ３Ｗ付近から西へ向う石綿コンクリート管、－116cm、－119cmの粘土中から出土した寛永通宝（４枚）などについては、まだ解釈がつかない。

エ．発掘調査中に地下水の水位が次第にあがり、３月12日は－117cm、15日は－105cm、18日は－103cmである。これらの数字を、昨年５月11日の記録(隣接する水道工事現場の所見)－150cmの地下水位と比べると大きな違いである。これをどうみたらよいか、わずか離れた井側付近に水脈が通っているのではないだろうか。

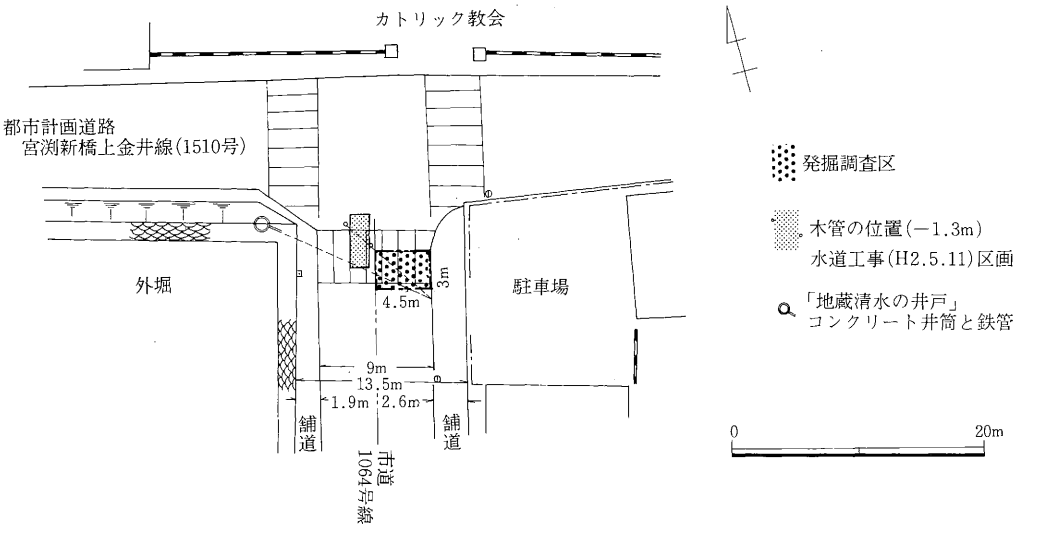
ま　と　め

今回の発掘調査は、調査地が交通の激しい交差点であったため、交通制限を道路片側にせざるを得なかった。このため調査区は4.5×３ｍと狭く、調査期間も８日間と短いものになり、行き届いた調査にはならなかった。しかし、幸いなことに、狭い調査区の中に二つ並んだ木製井側を検出するとともに、その上部構造と豊富な湧水を観察することができた。これが「地蔵清水ノ井戸」である。

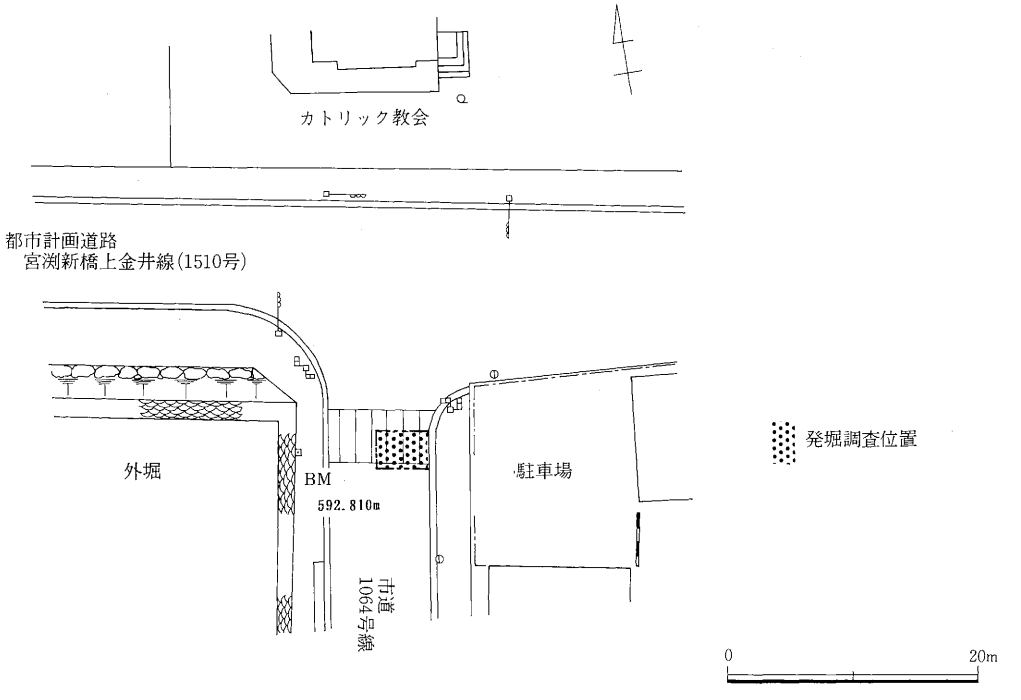
文献や口碑にいう「地蔵清水ノ井戸」の実在を確認することができ、その円型井側は大小二つで、サワラ材の側板には竹箍（二次的には鉄箍）が嵌っていることが判った。しかし、これではまだ井戸復興の充分な資料ではない。井側全体の形態や構造、附属する通水用の木管や分水用の枡などの検出もまだ見てない。井側横の「角木」や「平板」の説明もつかない。もし、調査期間が２週間ほどもあり、調査区を東西、南北とも１ｍほど広くし、深さも180cmもあればよかったと反省させられる。

今度の発掘調査で判ったように「地蔵清水ノ井戸」は全く道路上やや東寄りに位置しているから、これを復興するとしても現位置では無理である。近隣の場所に適地を選んで記念碑とも復興することになろうから、まず適地選定が先決である。こうして井戸復興の目算がたったら、それに併せて再度、発掘調査することが必要となる。その時の参考として4.5×３ｍの区画の各頂点に赤色のマーク・ピンを打っておいた。

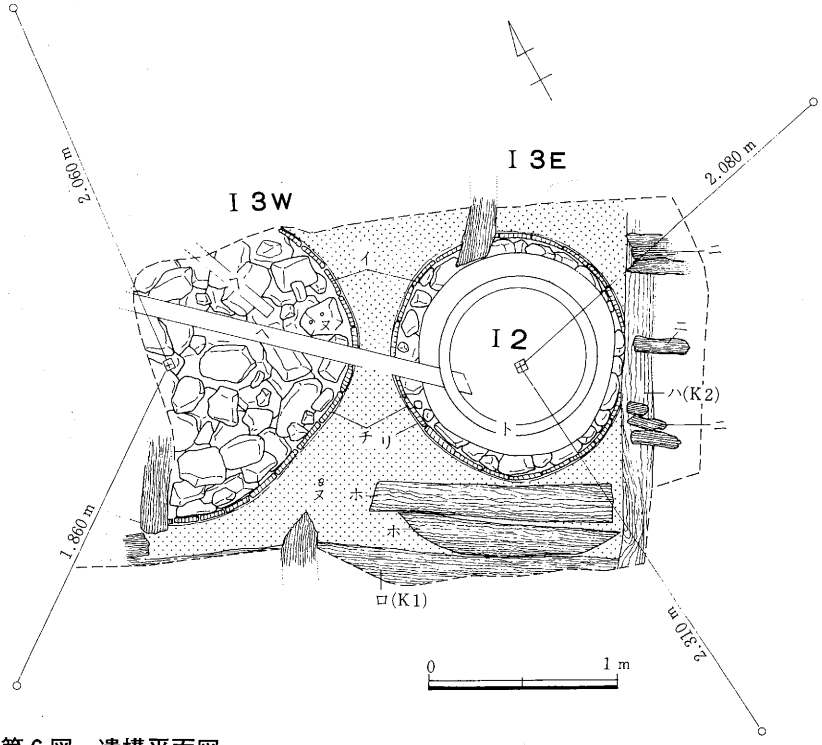
第3図　松本市内の湧水分布図



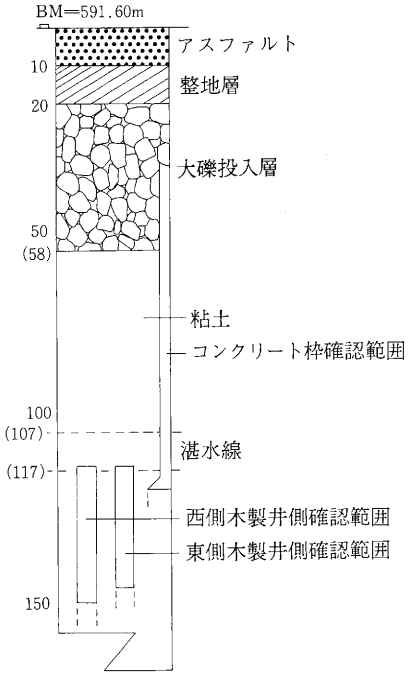
第4図　発掘調査区選定図



第5図　発掘調査位置図



第6図　遺構平面図



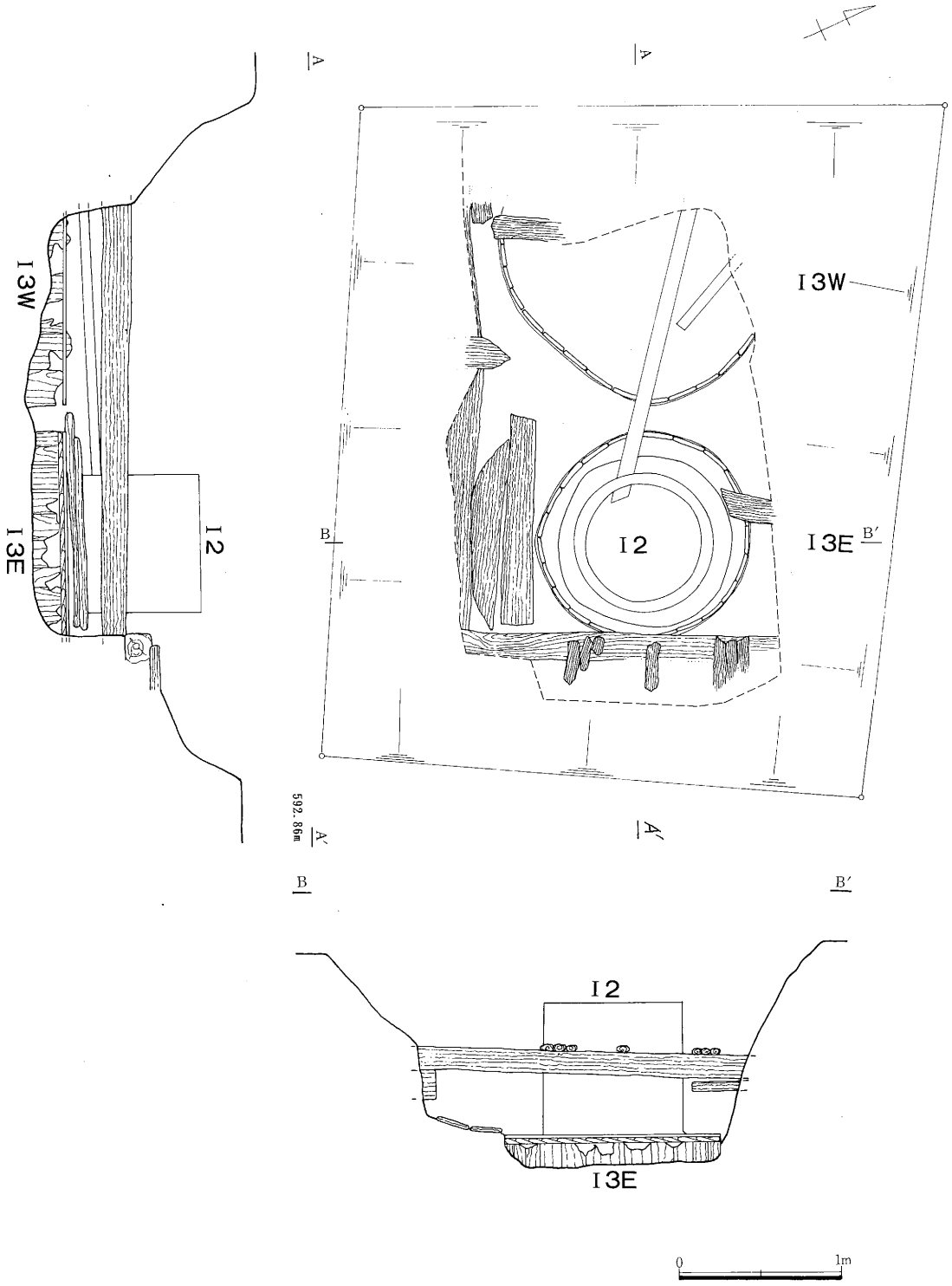
記号	名　　称	材　　質
イ	木製井側	サワラ材
ロ	角材（枠木）	クリ材
ハ	〃　〃	〃
ニ	小丸太	アカマツ材
ホ	平板	クリ材
ヘ	導水管	石綿管
ト	井筒	コンクリート
チ	タガ	鉄
リ	〃	竹
ヌ	古銭	寛永通宝

凡　例

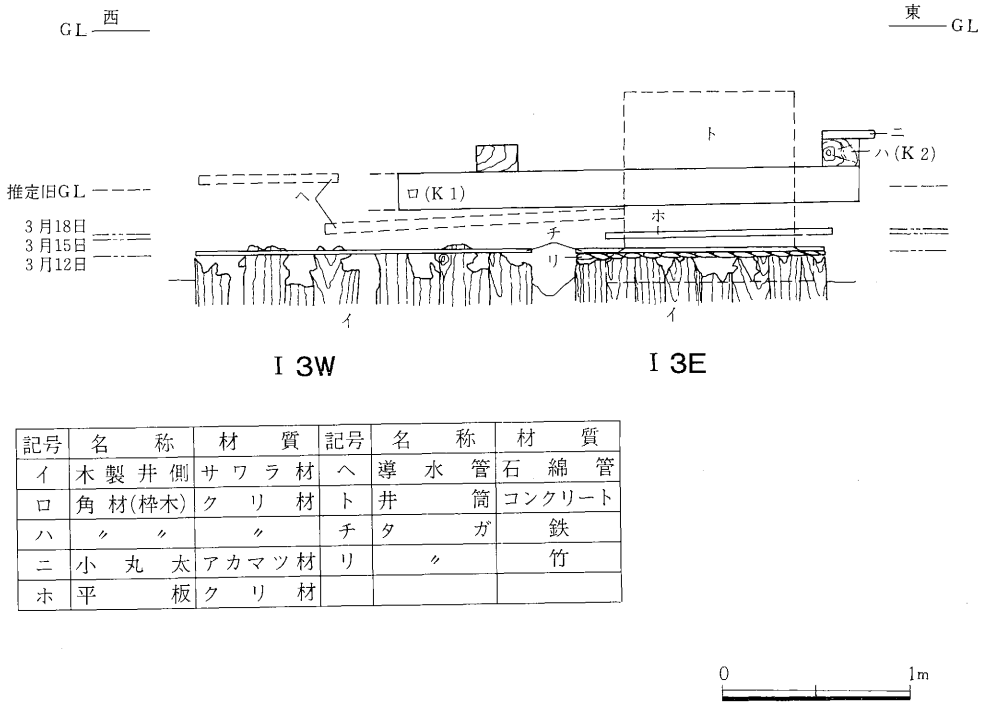
○　発掘調査範囲設定鋲

粘土層

第7図　地層断面図

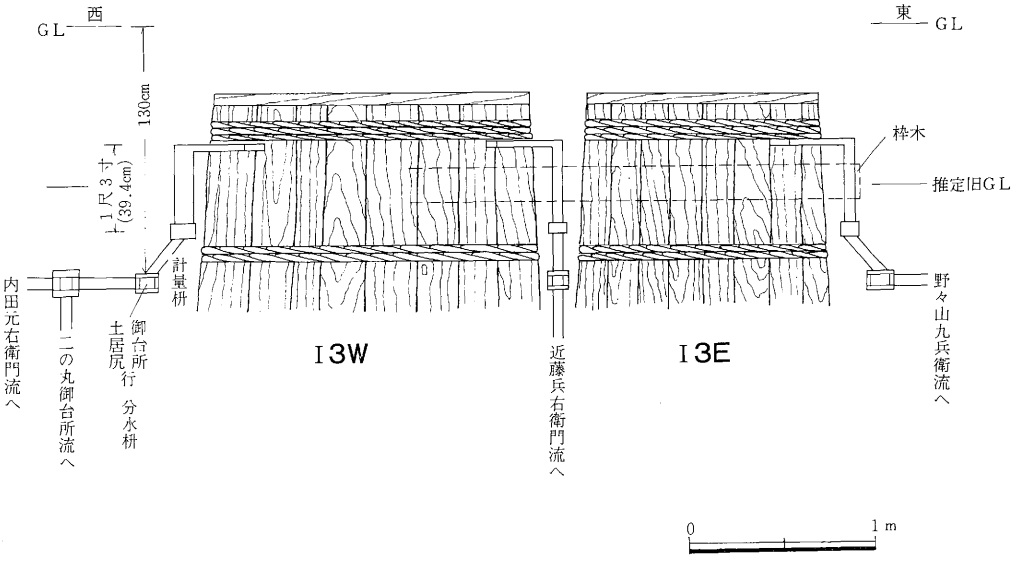


第8図　井戸実測図



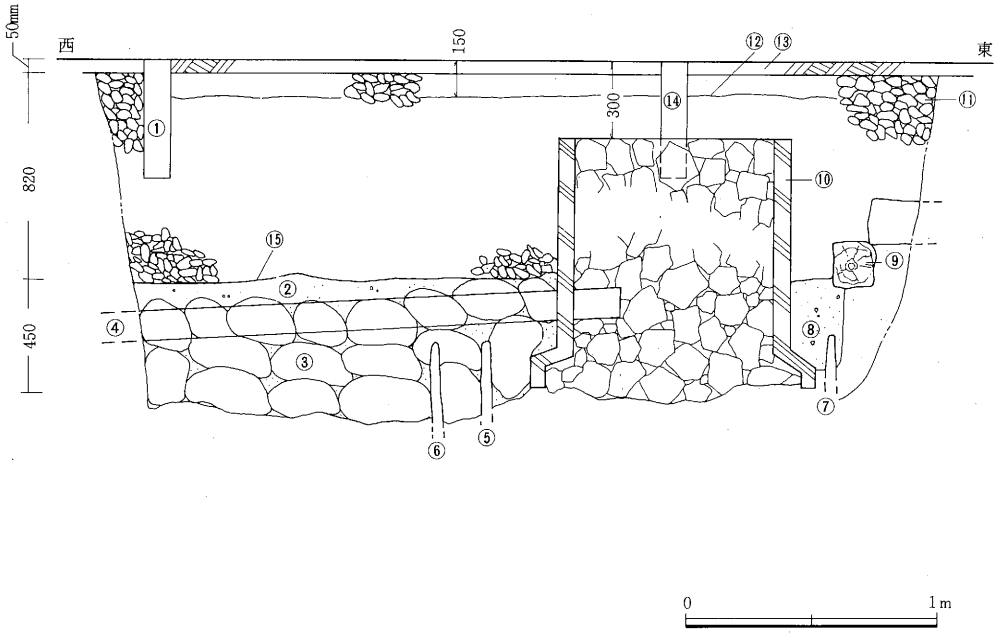
記号	名　称	材　質	記号	名　称	材　質
イ	木製井側	サワラ材	ヘ	導水管	石綿管
ロ	角材(枠木)	クリ材	ト	井筒	コンクリート
ハ	〃　〃	〃	チ	タガ	鉄
ニ	小丸太	アカマツ材	リ	〃	竹
ホ	平板	クリ材			

第9図　井戸遺構側面模式図



(備) 第10図復原模式図は嘉永4年井戸分水完成図を参考に推定したものである

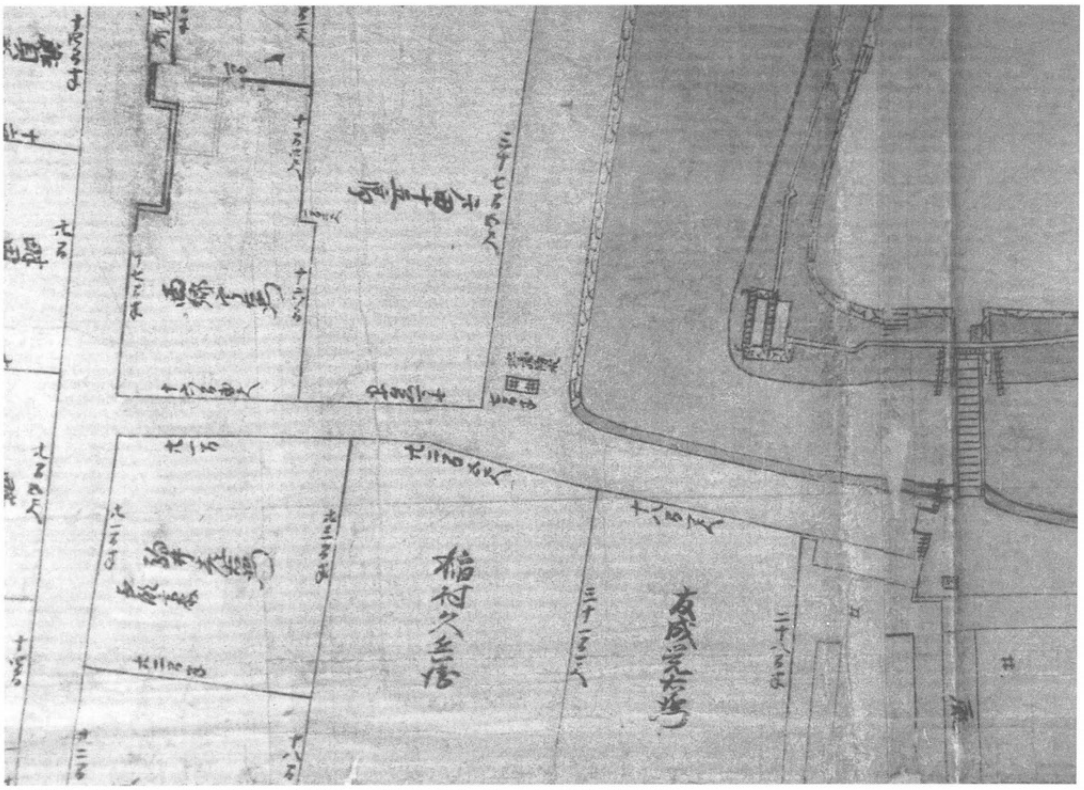
第10図　井戸復原模式図



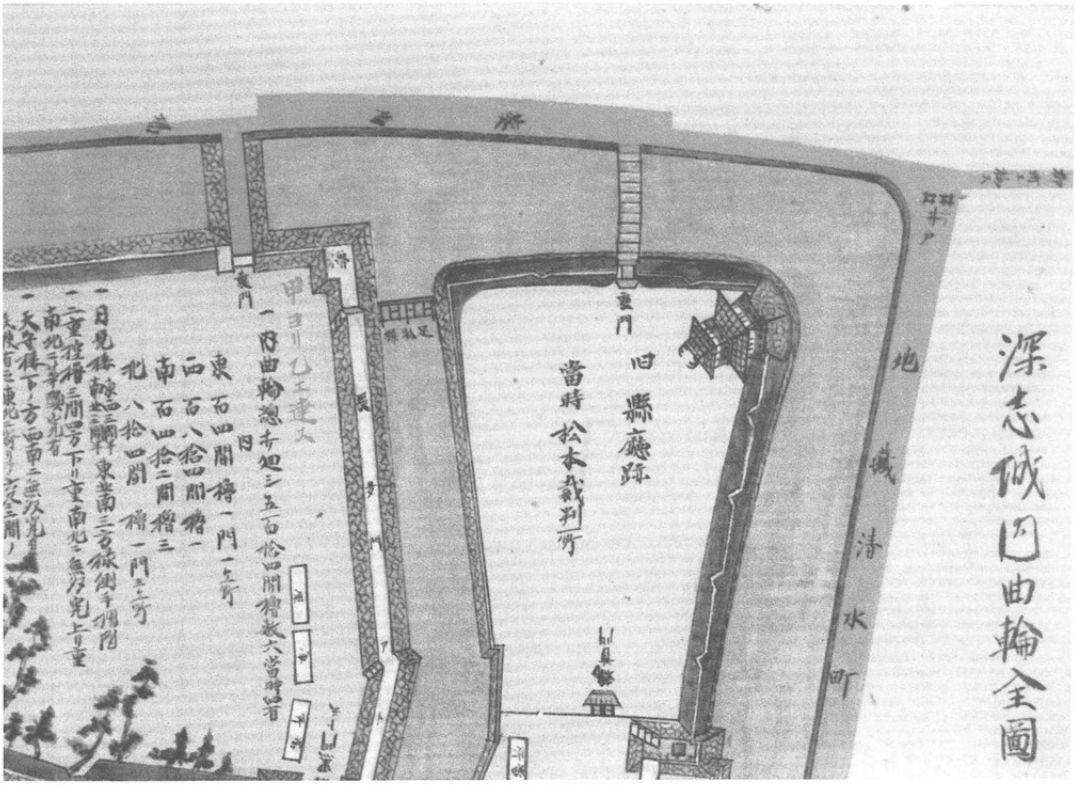
番号	名　称	番号	名　称
①	標識柱(井側の中心)	⑨	角材
②	砂埋戻し	⑩	コンクリート井筒(I2)
③	土のう	⑪	砕石埋戻し
④	石綿セメント管	⑫	ビニールシート
⑤	木製井側(I3E)	⑬	アスファルト舗装
⑥	木製井側(I3W)	⑭	標識柱(井側の中心)
⑦	木製井側(I3E)	⑮	ビニールシート
⑧	砂埋戻し		

第11図　埋戻し断面図（模式図）

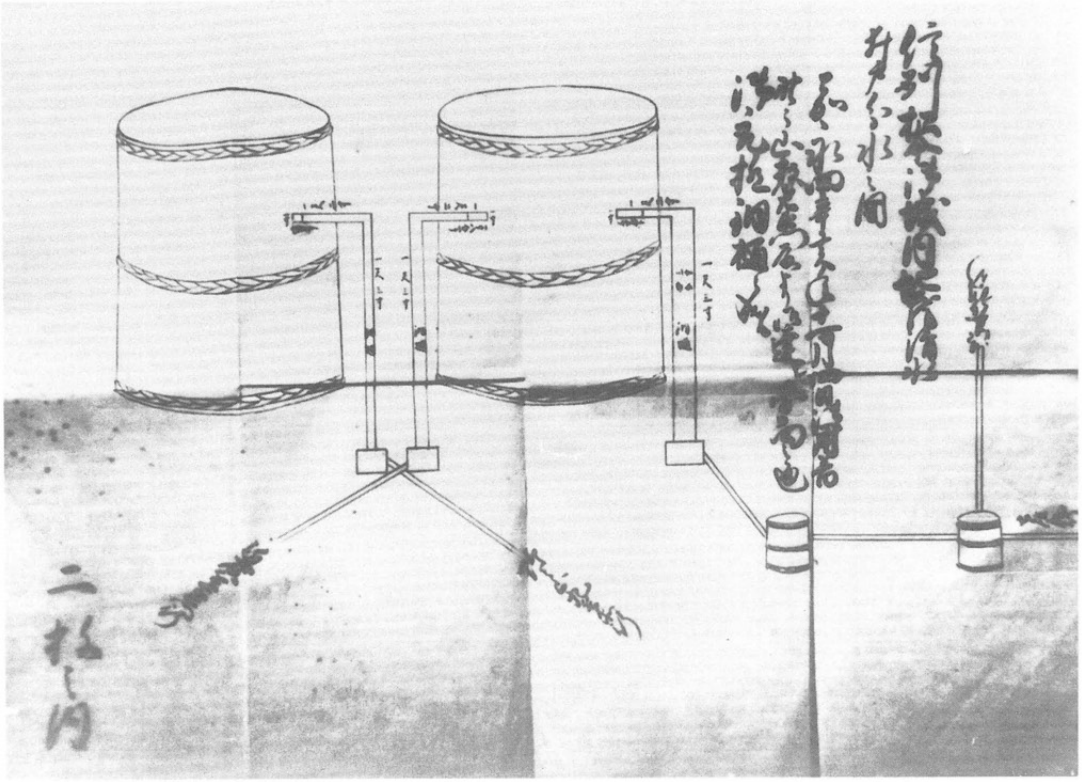
図　　版



図版 2 「松本城下大絵図」（部分）　享保13年　松本城管理事務所蔵

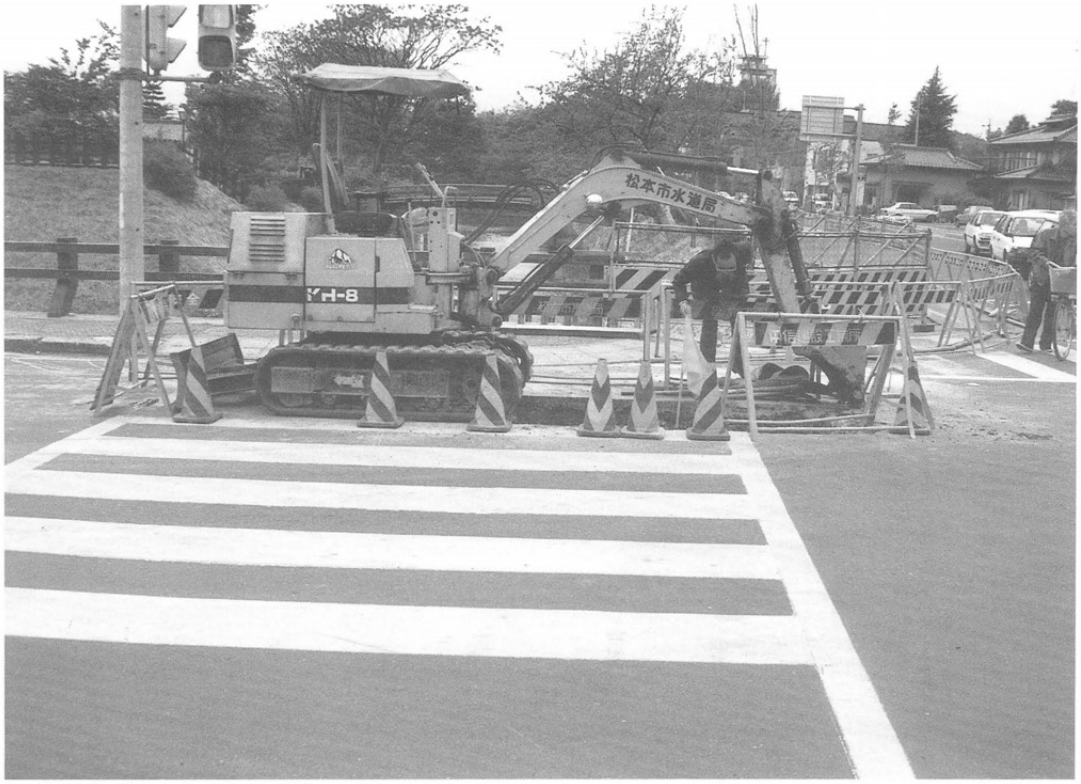


図版 3 「深志城内曲輪全図」　推定明治11年　松本中央図書館蔵

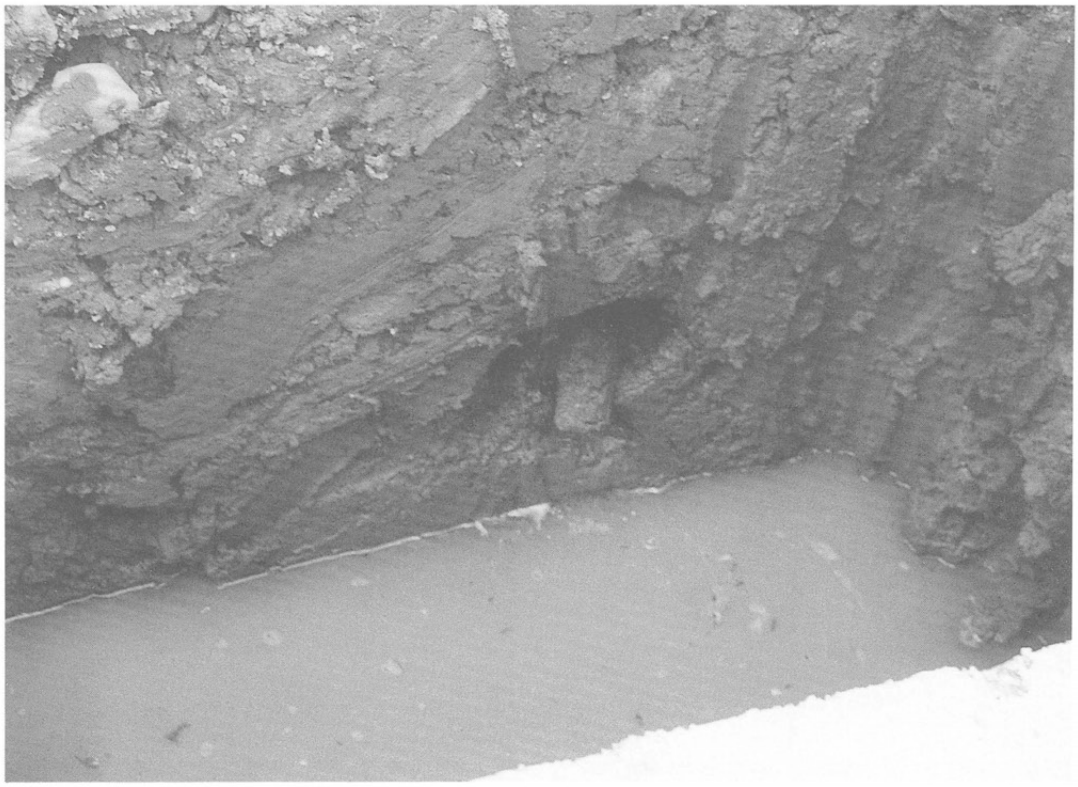


図版 4 「信州松本御城内地蔵清水井戸分水之図」 嘉永 4 年

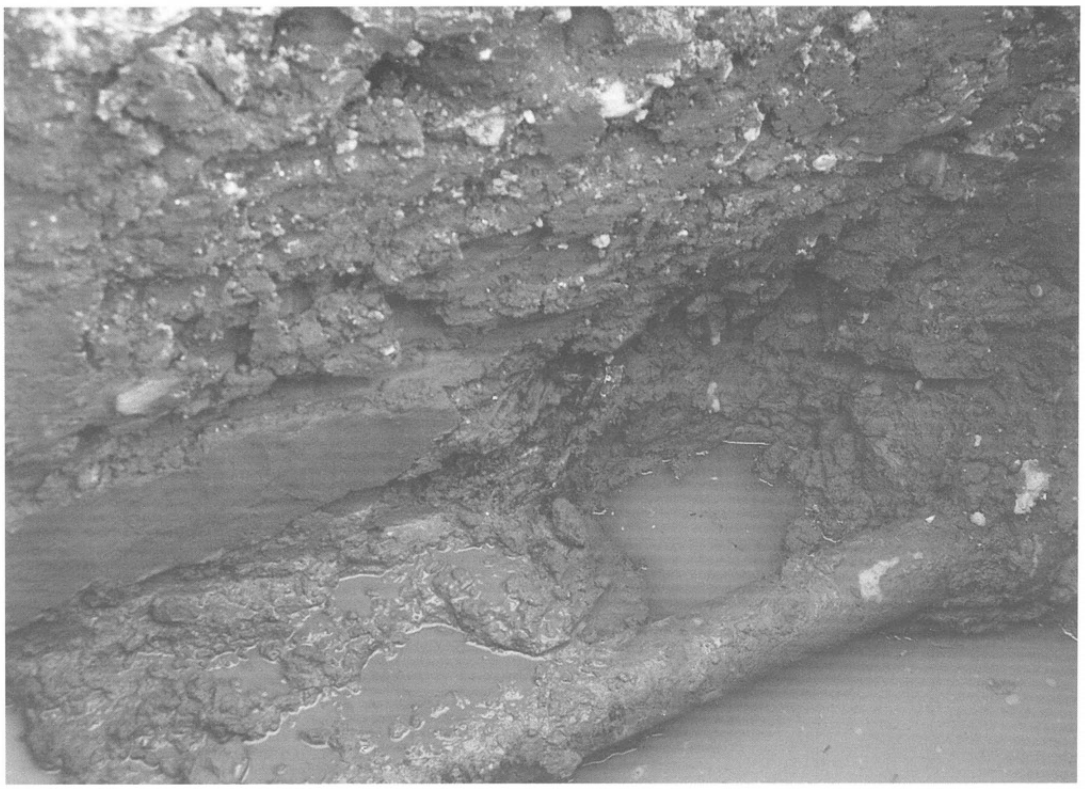
図版 5 昭和47年ころの「地蔵清水ノ井戸」 信濃毎日新聞社編「松本城」による



図版 6 「地蔵清水ノ井戸」付近の水道工事　(平成2.5.11)



図版 7 水道工事で検出した木管　東側地表下130cm　(平成2.5.11)



図版 8　水道工事で検出した木管　西側地表下130cm　(平成2.5.11)

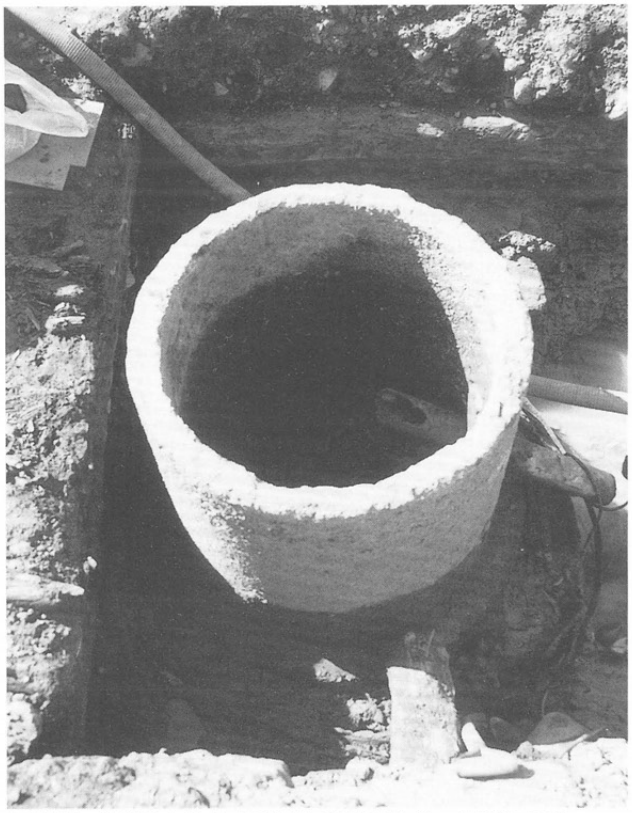
図版 9　コンクリート井筒　(I2)　とその上の角柱３本　(平成3.3.8)

図版10 西側に出たコンクリート角柱　地表下63cm　(平成3.3.8)

図版11 木製井側（I 3E）に載るコンクリート井筒（I 2）　(平成3.3.8)

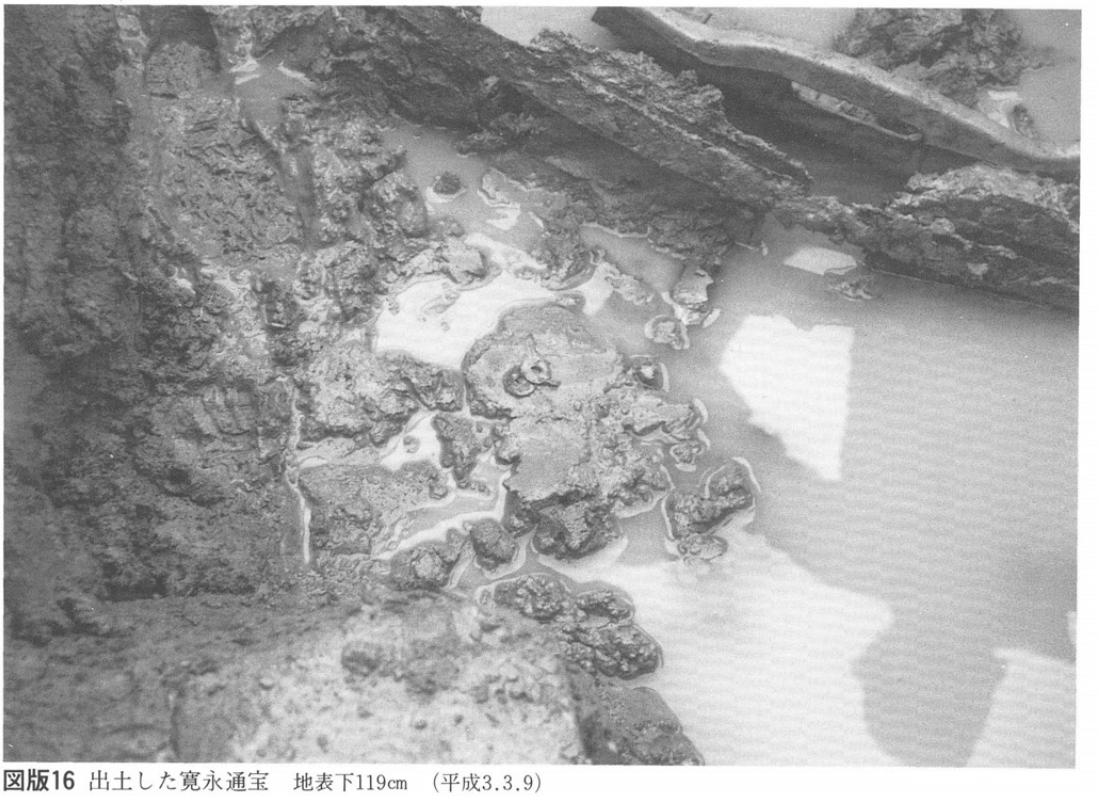
図版12 井筒（Ｉ２）と井側（I3E,I3W）の検出　（平成3.3.9）

図版13 木製井側（I3E）の鉄箍と竹箍　（平成3.3.9）

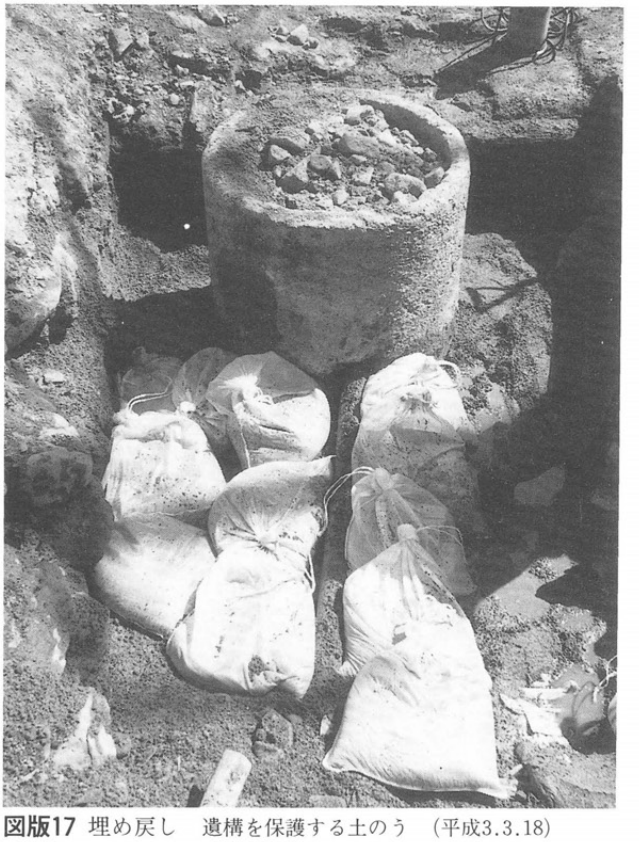


図版14 井側をとりまく東側と南側の角材　(平成3.3.9)

図版15 井筒から外堀へ向う長短の石綿管　(平成3.3.9)

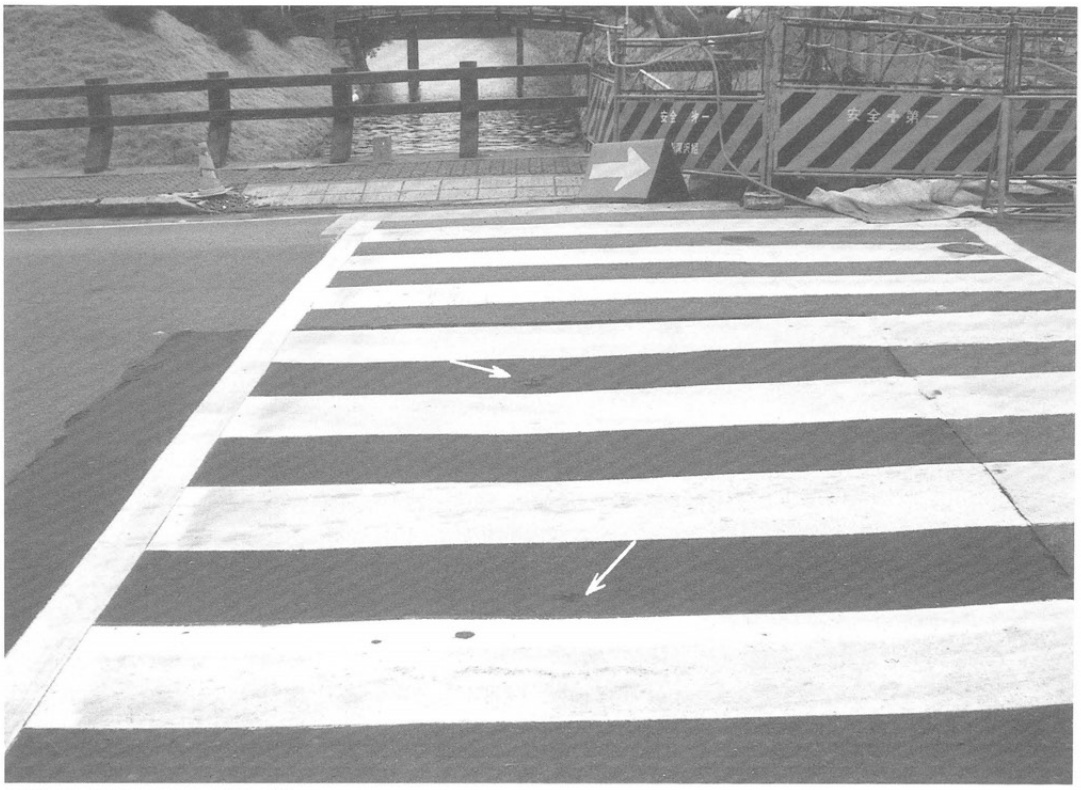


図版16 出土した寛永通宝　地表下119㎝　(平成3.3.9)



図版17 埋め戻し　遺構を保護する土のう　(平成3.3.18)

図版18 木製井側の中心にたつ標示杭　(平成3.3.18)



図版19 調査区路上の標示杭

図版20 発掘調査終了後の「地蔵清水ノ井戸」跡

地蔵清水井戸跡発掘調査報告書

平成４年３月20日印刷
平成４年３月25日発行

発行　松本市教育委員会
〒399 松本市丸の内3-7
TEL 0263-34-3000(代)

印刷　精美堂印刷株式会社